

特別講演

戦争の新たな虚構： なぜ戦争の記憶が失われつつあるのか

アンドリュー・ホスキンス

グラスゴー大学社会学部分野横断研究教授

ご紹介有り難うございます。この度はこの講演にお招き頂き、日本を初めて訪れる私を暖かくお迎え下さった、広島大学、平和科学研究センター、センター長の川野教授、そしてファン・デル・ドゥース博士にお礼を申し上げたいと思います。

The new war imaginary: Why we are losing the memory of warfare

Andrew Hoskins
@andrewhoskins
University of Glasgow

昨今、あたかも記憶継承ブームのようなものが起こっているように見えますが、同時に世界各地で、数多くの戦争に関する記憶が忘れられ、特に、核戦争の記憶が失われつつあります。「忘却」は、21世紀における危機の認識と危機への対応とに大きな影響を及ぼします。その現象を理解するには、戦争の記憶と忘却とがメディアを介して切っても切れない関係にあることに気

付かねばなりません。メディアと記憶とは、互いに複雑に絡まり合い、戦争の概念、性質、及びそれらがもたらす危機の認識を形成します。何が記憶に残り、何が忘れられたかを確認し、そのことがどのように影響するのかを知るためには、メディアと戦争と記憶との相互関係を調べる必要があります。そこで今日の講演では、核戦争の概念が、居場所を失ってどこかに追いやられ、忘れられた、ということについて、私の見解を述べさせていただきます。概念のずれは、主に二つの形で起こりますが、それについては、このすぐあとにお話しします。先ほどフック教授が、記憶の空間や構造が複数の階層から構成されることについて述べられましたが、有名な歴史家の Jay Winter も、様々な記憶の体系 (regime) について述べています。アジアと西洋では、記憶の体系が異なりますので、まず、西洋の記憶体系について少しお話ししましょう。特に、西洋諸国の主要メディアには、西洋諸国の視点から見た英雄譚のような戦争の記述が、未だに根強く残っています。英雄譚としての戦争です。添削された、すなわち好ましくない部分が切り捨てられた、特

定の画像を何度も繰り返し見せることによって、戦争を正当化し、賛美します。しかし、核戦争は英雄譚的ではない戦争なのです。

もう一つは、情報戦争において、テロリズムの脅威が急速に広まり、核の脅威への注意をそらしてしまった、という点です。そしてこれは、デジタルメディアとソーシャルメディアという、情報が飽和状態にあり、最前線からの画像が大量かつ無秩序に公開されている環境の中での話なのです。次に戦争の忘却というモデルについてお話しする前に、ここで技術と戦争と認識との三者関係という大切な点の説明をしましょう。記憶と戦争の正当性を考察する際に最も重要なのは、実体験者と観察者双方の戦争経験が、両者の間の（社会・心理的）距離を広げる技術によって形成されているという点です。著明な哲学者 Paul Virilio はこれを軍事認識のロジスティクスと呼んでいます。

Paul Virilio

'the history of battle is primarily the history of radically changing fields of perception. In other words, war consists not so much in scoring territorial, economic or other material victories as in appropriating the 'immateriality' of perceptual fields' (1989:7).

この論説によると、戦闘の歴史とは、主に抜本的な視野の変遷の歴史です。言い換えれば、戦争とは、領地や経済やその他の物資的戦果を得ることよりも、非実体的認知

視野を創生するための担体となることなのです。すなわち、Virilio が言わんとしていることは、戦争とは、物事をどのように見せて、どう認識させて、さらに、本日これまでの講演で述べられてきたように、どう覚えさせるかの戦いだということなのです。フック教授の講演にあったように、戦争の記憶はその正当化において非常に重要であり、争点となり得ます。では、ここで、戦争に対する画像の作用について、私が「偉大な矛盾」として捉えていることに戻りましょう。この「偉大な矛盾」とは、メディアと記憶に関することで、優れた研究者 Ariella Azoulay は二つの相反する主張があると述べています。

Saturating or ignoring?

- Azoulay (2008: 191):
- 'two contradictory assertions – one claiming that there are no images, while the other claiming that there are too many – are generally voiced in succession by the same speakers'.
- 'According to the first claim, there are too few images, thus there is nothing to look at. According to the second claim, there are too many, and therefore it has become impossible to look'.

このように、一方で画像が足りないとする傍ら、もう一方では多すぎると主張しています。前者は画像が少なすぎて見るものが全然ないと主張し、後者は逆にあまりにも戦争の画像が多すぎて、適切な情報を得ることが不可能になり、止まる所を知らない画像過多で飽和状態になり、戦争について、本質が何も見えなくなってしまうと主張しています。そして、この両局面において、画像が少なすぎたり多すぎたりするこ

とが、核戦争を西洋諸国、ひいては世界の意識から遠ざけている、という私の説に導いてくれます。

よろしければ、ここで数分間、米国の主要メディアによる画像をご覧いただきたいと思います。これらは、主だった戦争を、アメリカ中心の視点で視覚化し、アメリカの大手メディアを通じて、西洋文化に継承されてきたイメージです。今日、デジタルメディアを通じて、それは膨大な数の戦争の画像を見ることができるようにもかかわらず、西洋諸国の大手メディアは、戦争を未だに英雄譚として扱っています。このことについて、Michael Shaw は、西洋の三つの新聞社を調べています。各社は、それぞれアフガニスタンに生え抜きのカメラマンを送り込みました。そしてこの三人の報道写真家たちは、同じような写真を持ち帰ったのです。写真は2011年1月の2週間にわたって掲載された写真記事に使われました。一連の写真はどれも軍の医療送還用ヘリ*の後部に収容されて、アフガニスタン戦争の前線から、安全地帯に運ばれる負傷した米国海兵隊員を写したものでした。（*註：MEDical EVACuation、緊急医療送還の意）

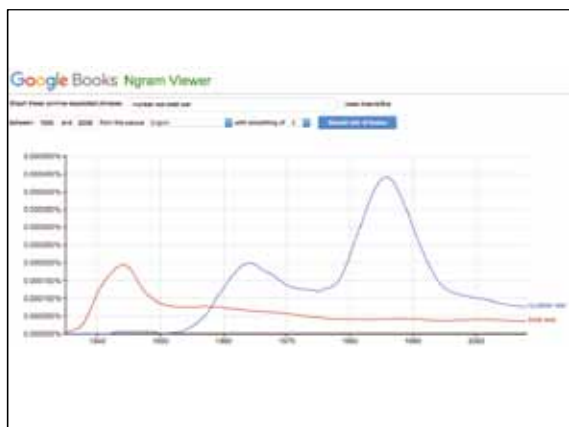
その後、Shaw は、2010年、2011年、2012年にも同じような写真が数多くの大手メディアに掲載されていることに気がきます。彼はこの現象を「重複」と呼び、我々の注意を喚起することで、報道写真家や兵士や戦地での任務、あるいは人命救助に対して敬意を払うものの、彼の言葉を借りれば「戦争を親しみのある空間として撮影し、英雄譚として繰り返し紹介している。兵士を成人と讃えて大々的に、繰り返し報道し

ても、その異常さに誰も気づかないとは、何という、これは米国の驚くべき自己優越主義の表れ」(Shaw, 2011)でしょうか。

実際、これはとても重要なことです。大手メディアによって、同じ写真、同じ戦争の側面を繰り返し見せられることで、我々は特定の戦争の見方に慣らされてしまい、それが当たり前になっていくのです。写真家の Simon Norfolk は、このような報道写真について、「ルールに乗せられて走っているようなもの」と述べています。過去何年間にもわたり、何百枚ものアフガニスタンの写真を撮ったところで、近代戦争は十年間続いたのです。少なくとも西洋の報道写真家には、戦争行為がどう人々の目に映るべきかということについては、未だに既成概念が深く根付いているようです。おまけに、この傾向は今日に始まったことではなく、このようなイメージの包埋は、西洋諸国における報道写真が長年辿ってきた道で、米国の歴史的戦争に遡ります。Norfolk は、1991年に始まったと述べています。David C. Turnley's の写真はその年の世界報道写真賞を受賞していますが、既存の写真、はっきり言えば、1965年4月にLife誌の表紙を飾った Larry Burrows のベトナム戦争の写真の焼き直しのようにもあります。とても有名な写真ですね。

さて、ここで私が申し上げたいのは、ある種の不一致があるということです。片や突発的で、未完結で、不安定で、流動的なメディアがあります。無秩序で、人々を困惑させ、戦争についても幾千万もの側面を表す情報過多な、ソーシャルメディアを始めとするデジタルメディアです。我々は今

日メディアとはこういうものだとして理解しているのですが、大手メディアは、戦争についてたったひとつの視点を優占的に扱い、恒久化させているのです。これは非常に不自然です。この講演の冒頭で述べましたように、私は西洋的な認識から核戦争が排除されてしまうことについてお話ししているのですが、西洋的な記憶体系は、これまで3度、核戦争を忘れてしまっています。これを実証するため、ごく簡単な Google Ngram Viewer のグラフをお見せしましょう。Google Books の Ngram Viewer とは、オンラインの書籍及び研究著書検索の一種なのですが、これは、Google がデジタル化し所蔵している膨大な数の書籍に含まれるあらゆる語を元に、このようなグラフを描画してくれるという利点があります。たとえば、ある期間における核戦争と全面戦争という言葉の出現率について、英語で検索すると、こういうグラフが出てきます。

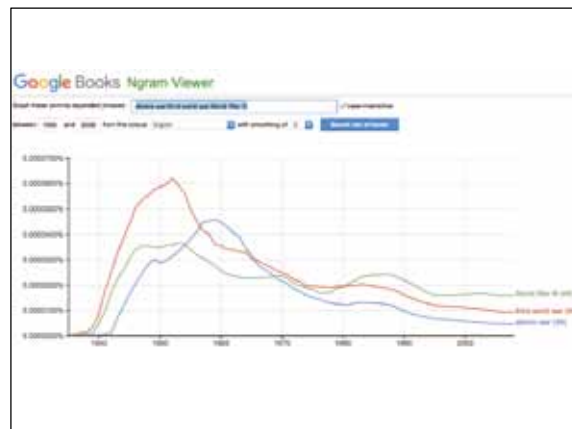


「核戦争」と「全面戦争」は同じような意味合いなのですが、このグラフを見ると、日本に対する爆撃については、「全面戦争」の方がよく使われているようです。「核戦争」という言葉は比較的后になって使われ始めま

す。ここで言いたいことは、(核戦争が) 三度も忘れられたということです。まず、広島と長崎への原爆投下後、「全面戦争」という言葉が急速に減退しています。続いて、キューバミサイル危機があった1962年、「核戦争」が激減します。これは米ロ首脳間で直接通信するためのワシントン～モスクワ間ホットラインが設けられた後ですね。そして三回目は、1985年以降の大きな落ち込みです。

この最後の落ち込みは勿論、米ロ間の緊張が高く、両国による軍備への投資が拡大し続けた、第二次冷戦の終結によるものです。すなわち、このグラフにあるように、「核兵器」という言葉の出現率の低下は、新たな世紀を迎えた後も続いています。さて、これは西側諸国における核戦争に対する認識について何を物語っているのでしょうか。

同じような傾向が、「核戦争 (atomic war)」と「第三次世界大戦」の概念に見られます。なお、これは未来の記憶であるということをお忘れずに。大惨事世界大戦勃発を防ぐためにはどうすべきか考えるとき、われわれがいかに日本に対する核攻撃を思い出すかを思い浮かべてみて下さい。それと同じようなパターンがこのグラフに表れているのです。



ということで、この場合、人々の意識から第三次世界大戦が起こるかもしれないという考えが意識から滑り落ちてしまったと言えるでしょう。もうそんなことは起こらない、と我々は思っているのです。英語の著書でのこういった表現や語の使われ方からすると、これは危険な忘却の一種ではないかと思えます。危険な忘却は独善をもたらします。具体的に言うと、核戦争の危機に対する認識の幅広い普及を取り去れば、核戦争は起こりやすくなります。この点について述べている評論家も少なくありません。これについて最初に意見を述べたのは Lukyanov で、冷戦以来、互いを真剣に受け止め、被害を抑える機構の配備を説いています。ですが、このような機構は既に全て崩壊したか浸蝕されている、と述べています。

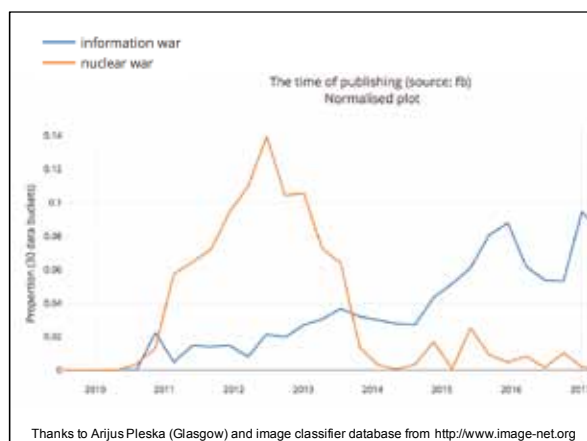
Max Fischer は、「世界は戦争の危機が頭上に吊されているのが見えていない」と述べています。言い換えれば、戦争が起こる可能性が増しているのです。アメリカ人の多くは、そんなことはありえない話であり、あるいは馬鹿げていると思うのですが、危機、そして警鐘もまた日々大きくなっているのです。Bruce G. Blair は、今日ほど核戦争勃発の敷居が低くなったことは、冷戦時にさえなかったと述べています。さて、戦争記憶の中に中心的課題が見出されましたが、私が求めるのは、核戦争の危機の認識です。これが先ほどお話した、混沌とも言えるソーシャルメディアにおける画像の氾濫と過剰の概念なのです。誰がどのような画像を投稿し共有しているか、そのパターンは、皆目、見当も付かなくな

ってきています。そこで私が思うのは、ネット上の戦争記憶のうち、残されたものと失われたものをどのように有効利用し始めることができるのだろうか、と言う点です。

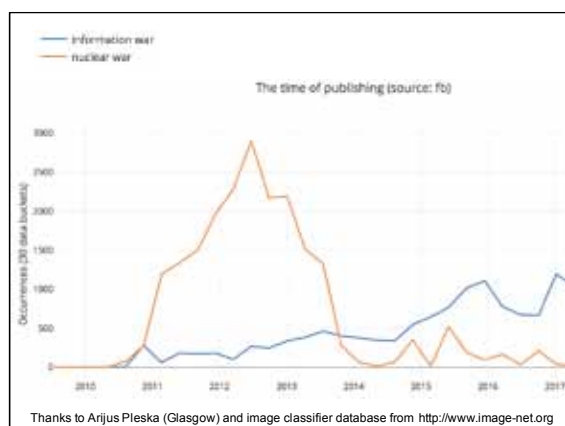
Dangerous forgetting

- Fyodor Lukyanov: 'since the Cold War, all the mechanisms for taking each other seriously and disposing means to control damage, all those mechanisms were disrupted or eroded'.
- Max Fisher: 'That the world does not see the risk of war hanging over it, in other words, makes that risk all the likelier. For most Americans, such predictions sound improbable, even silly. But the dangers are growing every week, as are the warnings'.
- Bruce G. Blair: 'There's a low nuclear threshold now that didn't exist during the Cold War'.

技術に頼らずしては、この疑問にどう答えていいのか私にはわかりません。メディアの情報源やサンプルの意義を見出し、ソーシャルメディア上にある何百万もの画像を分析するのは至難の業です。そのため、私はグラスゴー大学情報科学科の Arijus Pleska 氏と共同で事に当たりました。我々は、画像と様々な戦争との関係を調べるための機械学習ソフトウェアを開発してきました。このシンポジウムのために、核戦争に関するデータを読み込ませただけです。画像について述べますと、情報戦争は核戦争よりも分類が難しい分野です。しかし、ここ数年来フェイスブックに投稿された関連画像のグラフを得ています。この折れ線グラフは、フェイスブックに投稿された画像のうち、数千枚の抽出サンプルの推移を表しています。

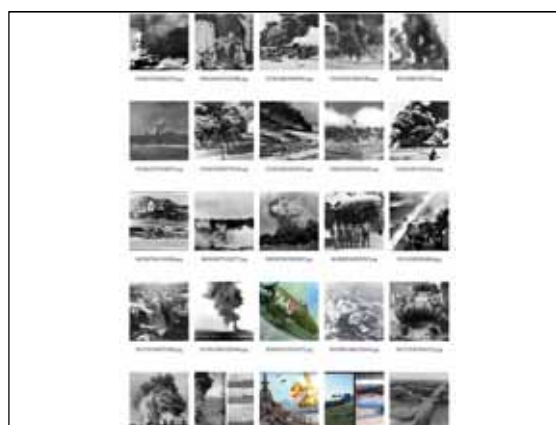


折れ線グラフから、2012年に核戦争関連画像のピークが伺えますが、何でこうなったのだろうと考えてみました。おそらく、これは2012年の10月にプーチンが核ミサイルのテストを行ったからではないか、と推察しました。



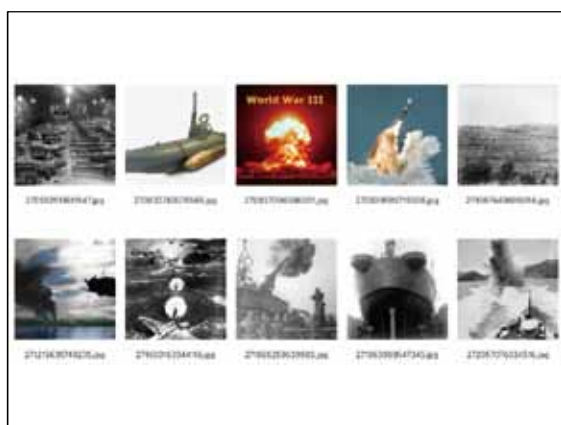
私の考えでは、これは戦争に関するバイラルアーカイブの存在を示しているのではないかと思います。ソーシャルメディアは即時的に画像を投稿し、共有し、それに対する立場を明確にしつつ、ある事象を追跡します。これは私が後に説明します「第三次記憶ブーム」の一部であり、アーカイブは、事後的に監修されたものではなく、事象そのものの一部と化します。ソーシャル

メディア上で公開されている一見混沌とした画像から、ある傾向を見出すことは可能です。私の研究の関心事は、今現在起こっていることを情報源とするソーシャルメディアが、どのように公の戦争関連資料に相反しうるかという点です。ここに挙げます画像は、核戦争と第三次世界大戦について調べた結果出てきたものです。

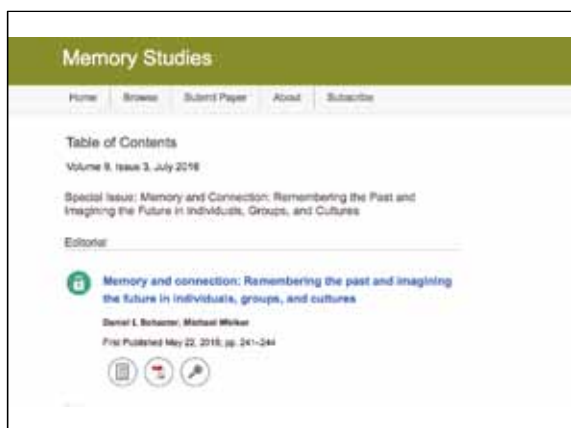


フェイスブックから無作為抽出された数千枚のサンプル画像には、戦争と核戦争について共通点があることが判明しました。まず、驚くべきことに、ほとんどが20世紀の戦争の写真でした。大半が白黒写真で、ここでもまた、検索対象の第三次世界大戦、ひいては全面戦争の脅威が、将来起こりうるのではなく、むしろ過去の概念から得たものとして扱われていることが、顕著に表れています。核戦争については、このような考え方が失われています。次に、ここ広島の素晴らしい資料館とは対照的なのですが、抽出した写真の大半が、キノコ雲の写真を含め、戦争に使われる兵器を撮影したものだと言うことが目につきます。人々でも死者でもない、負傷者でも、火傷を負

った人々でもない。戦争の結果の写真ではないのです。これもまた、添削による戦争の虚構、即ち想像の産物の一種ではないかと思うのです。近年、この現象が我々の未来にどう影響するかを考える発端となり、未来に対する記憶の影響のモデルを開発する研究チームもいくつか出てきました。



昨年（註：2016年）刊行された *Journal of Memory Studies* の記憶特別号「記憶とコネクション」で、神経心理学者の Conway と Loveday は、人間の個人記憶は、私たちがあり得ると思うものを、もっともらしく形作り、将来起こりうることを創り上げ、虚構の記憶を想起させているのだと述べています。



また、この特別号では、社会的側面について、集団記憶の改竄が未来に対する虚構を形成しうることについて触れており、この点でフック教授の論文が重要になります。彼はこの現象がどう起こるかを的確に証明しているのです。さらに、Shona Illingworth が述べているように、「我々が未来を想像するために、記憶はとても重要で、記憶喪失に陥った場合、過去を思い出すことだけではなく、将来を詳細に想像することも困難になる」のです。

Shona Illingworth (2014):
 'Memory is very important to our capacity to imagine the future ... If you suffer from amnesia, it makes it very difficult for you to not only inhabit your past, [...] but it becomes equally difficult to imagine the future in any detail'.

従って、重点課題は、核戦争を有用な形で想起できるようにすること。すなわち利用可能な過去の記憶として、先の戦争における核攻撃の記憶を構築することです。西洋メディアが描く全面戦争は、忘却も相まって、はるか過去の歴史として添削され、誤った形で回想されているのではないかと思うのです。少なくとも西洋ではあまり役に立たない戦争の記憶しかないようです。

この研究は、戦争の忘却に関する汎用モデル構築研究の一部です。残された講演の5分間をこのモデルの説明に費やしたいと思います。本日この講演で述べてきましたように、西洋そして他所でも第三次記憶ブームが起っています。著名な歴史学者の Jay

Winter は、二つの記憶ブームがあることを確認しています。まず、世代記憶ブームは、1890年代から1920年代にかけて、第一次世界大戦の戦死者の追悼記念を中心に据えた国家アイデンティティの構築上、記憶が重要だった時代に由来しています。続いて、第二次世界大戦の追憶が1960年代及び70年代の第二次記憶ブームをもたらしています。しかしながら、ご存知の通り、二次大戦終結後に世界各地で起こったのは、ある種の沈黙で、限られた、ほとんど個人的な回顧、拒絶、秘められたトラウマ、すなわち「非・記憶」だったのです。しかし、ひとたび記憶ブームが始まると、追悼などの催しは力を得て止める術のない記念式や行事の繰り返しへと変容しました。

Forgetting War

- Third memory boom: rage for memorialisation
- Implosion of memory and history
- Western mainstream redundant vision of 'heroic' warfare
- Social media unsettling of recent wars in memory
- Overexposure and underexposure: too many and too few images
- What constitutes the archive of war?
- Total/nuclear war forgotten three times
- Displaced by rise of threat of terrorism and information warfare
- Mistaken reading of everywhere media as 'everywhere war'

少なくとも西洋で、そして世界の他の地域でも、第二次記憶ブームは技術の発達をその原動力とし、音声・映像記録装置は新たな形で生存者証言資料の保存を可能にしました。これが冒頭で述べました、技術と記憶と回想・想起との間の結び付きです。第二次記憶ブームは、20世紀の終わり頃、1990年代に、衛星テレビ放送の到来とともに加速しました。技術の進歩は第二次世界

大戦に係わった国々で行われた、終戦50周年及び60周年記念催事を生中継することを可能にせしめたのです。しかし、今日では、もう第三次記憶ブームと呼ばれるものが始まっています。これが、性急で激的な記念化を駆るデジタルメディアの精力であり、伝播力なのです。

新たに起こった戦争や大災害に対する政策は、既に事態が終結する以前に激論の的となっています。イラク戦争やアフガニスタン戦争は、一般にもよく知られ、批判を浴びていますが、これらの戦争は、戦災者の遺族や軍部、アーティストなどにより、逸速くオンラインの追憶・記念スペースや資料館サイトに掲載されます。これが記憶における主要メディア環境なのです。息つく暇なく、記憶が落ち着くまで待つ時間もない環境です。

しかし、それと同時に、回想と忘却の不均衡も見られます。特定の戦争や大災害がいわゆる「記憶産業」に取り挙げられる傍ら、それ以外のものは次第に消えていきます。回想は必ずしも良いことではありませんし、忘れることが常に悪いとも限りません。歴史における記憶は互いに解け合いぼやけている様に思えます。IT技術は我々の時間や（記憶の）衰退、親密性、そして恒常性の理解を変化させました。歴史における記憶の限界も再定義されています。先ほどもお話ししましたように、ソーシャルメディアは戦争のバイラルアーカイブを形成しているのです。記憶を提示するにあたり、従来のメディアは、過去の視覚的テンプレートを用いて、現在起こっている事象の理解を容易にする一助として利用されてきま

した。ソーシャルメディアは、現状の理解のために一枚か二枚の写真を提供するのではなく、たとえそのほんの一部のみが共有され、他は全く共有されないとしても、何千枚、何百万枚もの写真を提供します。そのため、今日、何を以てして戦争アーカイブとするのかという問題が生じます。また、ネット上に何百万枚もの写真が載っているからと言って、必ずしもアクセスできると勘違いしてはいけません。将来、誰がどのようにこれらの画像にアクセスできるようになるのでしょうか。画像をどのように利用すればいいのでしょうか。ソーシャルメディアを利用して、どのような記憶を造り上げることができるのでしょうか。また、ソーシャルメディアは究極の忘却装置（媒体）なのでしょうか。

先に述べましたように、画像過多と不足の間に起こる矛盾があります。ソーシャルメディアは戦争の記憶を乱していると、私は思っています。また、現在西洋で盛んな風潮が英雄譚的な戦争の概念を永続させていることについてお話ししました。我々は、21世紀の紛争を正当化する一環として、今起こっている戦争を、特定の英雄譚的な型に納めたものばかりを見せられることから、抜け出せなくなっています。また、全面戦争が三度にわたって忘れられたことについて述べ、それが危険な忘却であることもお話ししました。これは言わば失敗なのです。将来起こりうる世界大戦を想起するために過去の戦争の記憶を記念化する上での失敗です。同時に、今日におけるテロリズムの脅威に対する過剰な意識は、従来の戦争の概念や認識を覆い隠しています。最後に、テロリズムや情報戦争などの脅

威に対する恒常的な認識の問題があります。常に戦争のイメージにさらされることは、忘却と同じなのです。確かに、西洋では1950年代がどういう時代だったかを忘れてしまっています。戦争と脅威と不安定さの10年間でした。今振り返ってみると、世界は当時と同じようには映りません。1950に起こっていた戦争や紛争は、今の私たちには見えません。我々は歴史を年代順に見て、そして忘れてしまう傾向があるのです。

まとめますと、今日の戦争を複雑にしているのは、下からの圧力です。シリアに拠点を構えた活動家や活動組織全てが、独自のツイッターまたはYouTubeアカウントを設け、種々雑多な記事を投稿し、デジタル戦争に利用できる素材を絶え間なくフィードしています。今の時代、誰でも出版社や、評論家、または記者になれます。そして、情報洪水の中、メディアの潮流次第で、過去が新たな形に塗り替えられているのです。ある事象の真実性を探り確認することがより一層難しくなっています。ポスト真実あるいはポスト真実時代のメディア戦争です。これは、ITを介した戦争の認識を、より大局的である潜在的な核戦争の脅威から逸らせているのです。先ほど述べましたように、これに取り代わり、地方、地域、そして世界で利用可能な戦争記憶の確立の必要性が生じています。過去の事象を有効利用するために、我々は、時間の経過やメディアによる歪曲と忘却から脱却しなければなりません。あるいは、どのように安定した歴史（史実）を確保できるのかを考える必要があるのかもしれませんが。平和科学研究センターは、これらの点を探求するために、最も適した研究機関だと思います。センターが展

開している必要不可欠な研究活動を指示し、
賛同致します。ご静聴有り難うございました。

